

運定め話と産育習俗

水 沢 謙 一

はじめに

(1) 一つの昔話の個別研究は、私にとっては、いつも実地のフィールドから始り、フィールドで終る。ある一つの話をはんとうに知るには、その話の類話を数多く採集して、比較研究することにある。採集してみないとわからない、未知な世界である。まったく思いがけないことがわかってくる面白さがある。

集めた結果は、一つの話には、さらに、いくつかの型があること、その一つ一つの型に、さまざまな変遷段階があることなどを知りうる。

(2) さらに、一つの話をはんとうに知るには、たんに話だけでなく、その話が育ってきた生活や民俗との相互関係を知ることにある。昔話は、地域生活のなかで決して孤立して生きてきたのではなく、深いかかわりをもって語られていた。そのかかわりを追ってみることが大切である。

(3) 以上が基本の立場で、運定め話と、これに深くかわる産育習俗について、そのどちらにも中心をなす産神信仰にふれたい。

一 運定め話（産神問答）

運定め話という一連の昔話がある。人の運は生まれるときに、産神によって定められるという産神信仰を秘めている。日本人の運命観や人生観を示している。越後のコトワザに「運と果報は首にのっている」があるほどである。人の運は生まれつきだという意味。

(1) 運定め話の型

長年集めた話を分類すると、つぎのような型となる。

- ① 水の命
 - ② アブと手斧
 - ③ 夫婦の運
 - ④ 女の福運（青竹三本と米一石など）
 - ⑤ 死人と夫婦
 - ⑥ 炭焼長者型
 - ⑦ 嫁入りと死
 - ⑧ その他
- このうち、まず、①の水の命を見たい。

三つの水の命

あったてんがな。

お宮に、旅の六部がとまっていたてや。ほうしると、夜なかに、チンチンチンと、馬の鈴音がしてきて、

「さて、ちんじやさま、村の産屋へいごうねかの。」と、声をかけたてんがの。

「これは、ホウキノカミサマ。せつかく、むかいにきてもろたども、こんや、思いがけないとまり客があつて、いがんねえすけ、お前さん方、よろしくお願ひします。」

「それじゃ。」

と、ホウキノカミサマは、いがした。

ちつとめえると、ホウキノカミサマが、チンチンチンと、もどつてこらして、

「ただいま、こんや、ウスノカミサマが、ちつとおそくお着きだつたども、めでたく、男の子が生まれたいの。」
と、いわしたてや。

「そうかの。その子の運は、なじだいの。」

「三つの水の命ということに、きまつた。」

そういうて、ホウキノカミサマは、もどつていがしたてや。

聞いていた六部は、つぎの朝はやく、子どもの生まれたうちへいって、神様方の話を知らせてや。ほうしるんだんが、そののしよは、

「この子が三つになったら、水のそはへやらんようにしんばならん。」

と、おもていた。

ほうしているうちに、その子が三つになって、外へも出さんように、氣つけていたども、ある日、うちのなかのノレンにひつからまつて死んだてや。長いノレンで波に千鳥の模様がついていたてや。いきがポーンとさけた。(長岡市寿町、寺沢マス(八三)、昭和五五)

この「水の命」の話に、産神として、チンジュサマ、ホウキノカミ、ウスノカミが登場している。生まれた子は、三つの水の命と運を定められ、波に千鳥の模様のノレンにからまつて命を失う。産神問答を聞いていた六部は、じつは旅の語り手であり、本話の伝播者だつた。

(2) どんな運

運定め話の、それぞれの型で定められる運は、それぞれことなるが、総合すると、人の寿命、職、縁組、福運で、いわば、人生の最大関心事であり、最重要事である。しかし、どうも、だいたい、男は不運で、女が福運にめぐまれているのは、かつて、女の社会的地位が高かつた時代の名残りか。

(3) 産神

運定め話の各型に登場する産神は、村の神(チンジュサマ)、山の神、ウスガミ、ホウキガミ、サエノカミ、ジゾウなどで、すでに、チンジュサマをむかいにくる神の名を忘れているのが、ずいぶんある。

(4) 産神問答を聞いている人

村のお宮にとまつた夜更けに、産神問答を聞いていて、生まれた子どもの運、縁組などを知る者は、旅僧、尼、山伏、神主、六部、行者などの宗教的な遊行人、武士、旅人、コジキ、富山の薬屋、ゴ

ぜ、木びぎ、村人などで、話を伝ひひろめた旅のカタリベが多く、かつての伝播者だった。

二 産育習俗

(1) オビヤ (ウブヤのなまり)

かつて、子どもを生むのは、村のオビヤ(ウブヤ)、だったと伝えていた。産屋(サンヤ)、産小屋(サンゴヤ)ともいった。今でも、言葉として、オビヤアキ(ウブヤアキ)、オビヤミマイ(ウブヤミマイ)、オビヤシナイ(ウブヤシナイ)が残っている。

(2) オビタテマンマ (ウブタテメシ)

子どもが生まれると、すぐに白い米をたいて、オビンガンサマ(ウブカミサマ)に献じたという。

(3) オビガンサマ (ウブカミ)

お産の神をオビガミ、オビガンサマ、オボガンサマなどといい、複数の神々で、村の神、山の神、臼神、帚神、便所神、地藏などであった。

村の神はチンジュサマで、子どもが生まれそうになると、家人が、新しいワラジを持って、お宮へむかいにいて、早くウブヤにきて生ませてほしいと頼んで、ワラジとともに家にもどる。子どもが生まれると、そのワラジを持ってお礼まいりにいき、お宮に献じてくる(南蒲原郡下田村)。

村の氏神様の床下の砂を、産婦の知らないうちに、御飯にかけて食べさせると安産になる(東蒲原郡津川町)。

産気づくと、村のチンジュサマの、お明しのとぼりさしの短いのを借りてきて、火をつけると、とぼりきらないうちに生まれるとい

う。お産が終れば、新しいお明しを持って、お礼まいりにいく(古志郡二十村郷)。

山の神もウブカミの一人だった。産気づくと、家人が馬をひいて山の神をむかいにいく。道中で馬がとまると、山の神がこられたといてひき返してきた(北蒲原郡出湯)。山の神は女神であるという伝承がある。越後の山村で村人が山へ木きり仕事にいて、鎌や鉈などが見えなくなるときがある。そういうときのうせものさがしには、男しゅは禪をはずして大切なことをふると、すぐに出てくるという。山の神は女性であるから、男の大切なところを見せるのだという。山の神は春には田の神となり、秋にはまた山の神になるという伝承は、とくに下越地方に多い。作物がみのあることは、作物の子を生むことでもあり、山の神が産神である伝承と、田の神でもあるという伝承は、深いかかわりをもっている。

臼神は、チンジュガミと臼神と帚神がこないうちは、子どもは生まれぬという伝承(糸魚川市大久保)があるほどに、産神の大切な神である。産気づいたら臼の上に何かをあげておく(中魚沼郡田沢)。難産のときと、臼と産婦を縄などでゆわいる(北魚沼郡二分)。産気づいたら臼を上向きにする(栃尾市土が谷)。

帚神がこない子どもは生まれぬ(中魚沼郡津南町)。産婦は帚をまたぐ(南蒲原郡下田村)。産気づいたら帚をさかさに立てると、早く生まれる(北魚沼郡二分)。

産気づくと、夫は納屋にある臼を横にして、その上に帚をあげる。帚神がこないと生まれぬと信じられていた。また、産が重く気を失ったようになったタラツキのときは、嫁の実母が井戸に顔を出して、嫁の名を大声で呼んだ(白根市戸頭)。産気づくと、帚で産婦のからだをなげた(南魚沼郡大和町辻又)。

子どもが生まれてから、セツチンマイリ（便所まいり）といつて、子どもの髪をそったのと、米をすこし、紙に包んだのを持って、便所まいりをする（南魚沼郡湯沢町谷後）。

村の中の地蔵、村はずれの地蔵もまた、ウブカミの一人。子どもが生まれてから、眠っていて、ニコニコと笑うのをジゾウワライといつて、地蔵さまが笑わせるとさえない（各地）。

(4) ウブカミワライとウブカミヒネリ

子どもが生まれてから、意識もはっきりしないうちに、眠っていて笑うのを、オビカミワライ、オスナワライ、オブスナワライ、チンジュワライ、カミワライ、ジゾウワライ（各地）という。そのなかで、村の神が笑わせるといふのが、もつとも多く、村のチンジュカミ、ウジガミ、つまり、村の神が、もつとも大切な産神であった。生まれた子どもの尻の青いしるしを、オビカミヒネリ、オスナヒネリ、オブスナヒネリ、チンジュヒネリ、カミヒネリ、ジゾウヒネリといつて、青いしるしが大きいと、さち多く、しあわせであるという。やはり、村の神が生まれる子を、そら、出ていけと、ひねったという伝承。

(5) ミヤマイリ

子どもが生まれてから、トリアゲバサが生まれた子どもをつれて、男は48日目、女は50日目に、ミヤマイリ（ウブスナマイリ、オスナマイリ）に行く。お宮で子どもをころがして泣かせ、その泣き声を神にとどける（中魚沼郡津南町）。

ミヤマイリに子どもを泣かせるのは、（南魚沼、北魚沼、古志郡など）各地にあった。

三 結語

以上によって、運定めにも、産習俗にも、産神信仰が、かつて、色濃く見られたことが、判然とした。つまり、運定め話という一群の昔話は、村の産習俗のなかの産神信仰に深いかわりをもっていたことを知る。
(みずさわ けんいち)